

新潮・文庫

望 郷

新田次郎著



新潮社



ほう
望

きよう
郷

定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 草 122 K

昭和五十二年一月二十日 発行
昭和五十二年五月十五日 三刷

著 者
新 田 次 郎

発 行 者
佐 藤 亮 一

発 行 所
株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

望 郷

新 田 次 郎 著



目次

豆満江		七
望郷		三
夕日		二六九
七人の逃亡兵		二八九
生き残った一人		三三七
西沙島から蒸発した男		三六九
解説 山田智彦		

望

鄉

豆^と

満^{まん}

江^{こう}

延吉捕虜收容所
えんぎつ

1

全身しびれるような寒さであつた。

汽車はいつか止つていた。真暗な貨車の中にじつとしていると、そのまま凍えてしまいそうであつた。すべてあきらめきつたのか、行先の詮索せんさくに精も根もつき果てたのか、ここがどこであるかを外に出て確かめようとする者さえない。皆眼は覺ましていたが、誰も口をきかなかつた。

たった一つの窓から冷たい風と共に朝の光が訪れようとしていた。大地のつめたさが、鉄路から車輪、車輪から貨車の床に伝わって、坐っている下半身が凍りつきそうな氣持だつた。そうすることが習慣のように、捕虜達は小刻みに身体を震わせて、寒さから逃れようとした。寒氣は腰から背に上り、やがて後頭部に疼痛とうつうのような刺戟しげきを与えた。堪えられなくなつた男は立上つて足踏みをした。疲れ果てたのか、うるさいと怒鳴る男もいない。

藤田は立上つて小窓から外を見た。真赤な火の帯が、遠くの山の稜線りやうせんにそつて動いていた。火の帯の中から蛇の舌のような炎が、ほんの少しばかり明けそめている薄明の空にゆらめいていた。大きな山の一角から起つた野火が、峰に達しているところであつた。野火はそれほどはつきりと

よく見えていたが、付近の地形は皆目分らなかった。汽車はどこかの駅に止っていた。幾つかの黒い貨車が並んでいた。

全員下車の命令がかかるまで、誰もここが延吉であることは知らなかった。男達はそこが延吉であろうがシベリアであろうが、とにかく終点に早く着くことを望んでいた。

プラットホームに整列させられる頃ようやく夜が明けた。野火は黒い煙を空に上げていた。低い雪雲が全天を覆っていた。ソ連兵が幾人かやって来て人員の点呼をやった。平壤の三合里捕虜收容所を出発する際、確かに千名ぴたりとあったのが、ここまで来る途中に数名の脱走者があった。点呼を取るソ連兵の肩に雪がちらちら降り始めた。風も出た。夏衣の兵隊服一枚の男達は藁むしろ一枚を外套がわりに着て長い間立たされていた。吹雪の中を捕虜第八大隊は行進を起した。軍隊服の胸に縫いつけた、第八大隊の識別章の白い布は、蝶のようにバタバタ羽ばたきをしていた。長い列は駅を後に町に向かって動き出していた。

ずっと先に城のような白い建物が見えた。道はそれに向って真直ぐ続いていた。道路の両側に赤煉瓦の、一見日本人の住宅とわかる建物が並んでいた。どの家も堅く戸が締り、こわされた窓には板がぶちつけてあり、有刺鉄線が張りめぐらしてあった。

部隊が進むと、申し合せたように扉が細く開けられた。中から覗いている人があるらしい。坊主頭が出たり、引込んだりした。一軒の家から、少年が走って来た。近づく、少年ではなく坊主頭にした婦人であった。女はあたりを窺いながら、

「兵隊さん達はどこからお出でになりましたか」

と聞く。平壤と答えると、では私の夫は知らないかと名前をいう。

その女が引返すと、その赤い煉瓦街に、地下の通路か、電話連絡でもあるかのように、一度にどっと坊主頭の女が現われて平壤にやられた夫の安否をたずねるのだった。だが女達は、ソ連兵が近づくと顔色を変えて逃げ去っていった。逃げ方があまりにも早かった。

「藤田さん、ここは定州ていしゅうの町より情況が悪いですぜ」

前に居る情報局の国村ささやが囁いた。

「どこへ行くんですしろう」

後ろにいる、大きな白いマスクをかけた心配性の原口がつぶやく。

「どこへ？ わかるもんか」

藤田と並んで、割合にしっかりと土を踏んでいる土岐とぎが答える。長い沈黙が続く。自分達の行先が何一つ分っていないことを知りながらも、誰かに聞きたいのは山々で、聞く方も聞かれた方も不愉快な感じのまま会話は中断されて怒った顔になる。

城と見えたのは旧間島省公署かんとうの跡であった。どの窓からもオムツがひらひらしていた。第八大隊は町の中央を行進していった。人垣も出来ないし、珍しそうに見送る人もいない。無関心な市民の表情が男達の心に不吉な暗示を投げる。同じような捕虜の群れが相当数この町を行進しているに違いない。

延吉は朝鮮人の町である。中央の目貫き通りを過ぎて丘陵にかかると、警戒は更に嚴重となった。吹雪はやんで薄日がさしていた。ソ連兵の持つ自動小銃がピカッピカッと光る。丘を越すと前方がぱっと開けた。兵舎の群れ、それを取巻く嚴重な鉄条網。大きな動揺が捕虜の間から起った。「話が違ふぞ」そういう反抗が行軍を鈍らせて隊伍が乱れた。

しかし、それもほんの一瞬のことであつた。吹く風に顔をそらすようにうつむいて男達は運命に従つていった。延吉捕虜收容所の門は大きく開かれて、第八大隊を一度に呑みこむと、再び開かなかつた。

藤田は、終戦と同時に新京しんきやうから北鮮の定州に避難した。十月末この町の男という男は勤労ということで平壤に送られ、更に平壤郊外三合里捕虜收容所に入れられて衣服は全部脱いで、軍隊服に着かえさせられた。日本へ送還されるという話であつた。

第八大隊の一千名はこうして北鮮の各地から集められた日本人の市民、公官吏、警察官によつて編成された部隊であつた。十一月三日、

「第八大隊は一足お先に日本に向つて帰還いたします」

と大隊長が大声で立派に申告して出発してから二週間は経っていた。元山港げんざんから乗船する、清津港しんきやうから乗船する、そういった話が全部嘘であつたことが、いまやっと分つたのである。

破壊するということがいかに容易なものを藤田は呆然ぼうぜんと見詰めていた。十坪ばかりの小屋が眼の前で屋根が剝はがされ、床板がはがれ、壁板が取られ、柱が引きずり倒されて五分もたたない間にぺしゃんこになった。一千名に近い男がどっとおし寄せたからである。藤田はその周囲をま

ごまごしていたが、一枚の板をやっと拾うと、こ脇にかかえて兵舎に走り込んだ。

割当てられた兵舎には各部屋毎にペーチカが備えつけてあった。二段装置の下の段に藤田の分隊は席を与えられた。男達は狂気のように木片を探し、筵むしろを探し、何かの布切れを拾い、古い軍靴をあさって来た。兵舎が幾つも並んでいたが、がらあきの兵舎が多かった。男達はこの收容所の隅から隅まで荒し廻り、遂に食糧庫にまで足を延ばして炊事班の兵隊につかまった。全員集合を命ぜられたのは、この收容所について席を与えられてから三十分も経っていなかった。

「きさま達のような泥棒野郎の集団には、という言葉さえないぞ。この大隊の半分は警察官や官吏、後の半分は市民で中には相当な地位の人もある筈だ……だのにこのざまはなんだ、收容所の中を匪賊ひぞくのように荒し廻り、他の兵舎に押し入り、炊事班にまで行って食糧をかつぱらった奴がある。俺はもう知らん、きさま達は勝手にシベリアへでもどこへでも送られるがいい。日本人の面目を失った救い難い奴等ばかりだ……」

大隊長がかんかんに怒った。掠奪りやくだつしたものは全部、もとの位置に置いてこいという命令は出たが、誰一人従うものはなかった。

大隊長の叱咤しったがすんだ後で、ペーチカは真赤に燃え上り、男達は掠奪品の整理に多忙を極めていた。麻袋を持って来た男、藁わらブトンの布袋を引剥がして来た男、隣の兵舎から軍靴をかつぱらって来た男達。藤田はその男達の行動を輕蔑けいべつする気持よりも、かつぱらった物に対する羨望せんぼうの方が強かった。

飯罐めしかん入りの高粱飯コウリヤンめしが運びこまれた。湯気の立っている人間らしい食事に男達は幾日かぶりで生

氣を取戻した。三合里捕虜收容所に入れられてからちょうど二十日目であった。

夜が明けると十時の朝食が待遠しく、飯糰返納が過ぎると、その頃の午後四時の夕食がひたすらに待たれた。一日二食主義はこうして規則正しく繰返され、その間の長い時間を男達はデマと想像に過していった。

落着いて来ると兵舎の配置や、前からこの收容所に居る兵隊達の動向が分り、この收容所は日本に帰るたまりではない事がほぼ想像ついて来た。この收容所から多くの兵達がシベリアへ送られたことは確かであった。だが第八大隊の男達は、(自分達は市民である、だから兵隊と行動を共にする理由がない、日本に帰されるのが本当だ)と信じこもうとした。日本に帰されるとすれば延吉に残っている日本人と同じ行動がとられるべきであるが、鉄条網を通して伝えられて来るニュースはデマばかりで一つとして信用に足るものはなかった。

すでに十一月は半ばを過ぎ、寒い日が続いた。

3

墓掘りという妙な名前の労働が始められた。広い練兵場の隅から一定間隔を置いて、長さ二メートル、巾一メートル、深さ二メートルの穴が掘られていくのである。何万人いるか知れない捕虜收容所の死亡を見越しての作業である。

デマが飛んだ。墓掘りの労働に出た男はその穴に入る運命になるのだというのである。外へ出られる労働ならば志願者は多かったが、墓掘りを希望するものはなかった。墓掘りは重労働だか

ら一食分余計に食わせるといふ命令があったが、男達は動かなかった。

強制的な割当が来ると男達はスコップを持ってやっと立上った。藤田と土岐、原口の三名に割当があった。情報屋の国村はタバコを代償として墓穴掘りの番を交替して貰った。広い庭には既に雪が積っていた。凍った表土をツルハシでおこして、その下をスコップで割るのである。若い衛生兵長が墓掘りの指揮を取っていた。

「こらっ、もっと力を入ろ！」

まったく軍隊式であった。この収容所は将校以下下士官は全部肩章をつけていた。まったくの軍隊の延長であったが、第八大隊のような星のない終戦後の兵隊は面喰ってぼやぼやしては怒鳴られていた。

「そんな腰付で二千人の墓穴が掘れるか、ぐずぐずしていると、また雪になるぞ、今度雪になったら、もう掘れない。死体は野晒^{のさし}しだ」

男達ははっとして掘る手を止めた。

「二千人？」

「そうだ、この冬で二千人はいかれるだろうぜ」

衛生兵は昂然^{こうぜん}といひはなった。

「一体、誰がそんなに死ぬんだ」

「誰が？ きさま達が死ぬんだ、いまに見ろ、きさま達の兵舎に発疹^{はっしん}チフスが伝染していく、あれにかかると日本人は一ころさ」

衛生兵は人ごとのようにいう。

「はやっているんですかあれが」

「ばかやろう、病院はあれで一杯だ、あれは敗戦病っていつてな、第一次世界大戦のときドイツの捕虜は……」

「よせっ！」

土岐であった。穴の中からスコップを持って飛び出した土岐は衛生兵長の前に立っていった。「もう一度、いってみろ、この穴の中にぶち込むぞ、偉そうに兵長面をしやあがって、負けた軍隊に階級があるのか、おい」

土岐は軍隊の経験があった。兵長との争いはどうやら土岐に分が**ぶ**あった。激しくいい合いをしている二人の顔に真赤な夕陽があたった。

4

「明日あたり何か移動がありそうですぜ」

情報屋の国村がタバコを売りに来ていった。国村はどこから情報を仕入れるのか不思議に早耳であるし、当る場合が多かった。

翌朝、全員装具を持って営庭に集合の号令がかかった。

例によって、日本に帰れる、ソ連に送られるとデマは二つに分れて飛びかった。営庭には外**がいとう**套を着た軍医が並んでいた。第八大隊はここで身体検査を受けた。上半身裸になって軍医の前に立